＊＊＊＊＊＊あなたの町の情報誌＊＊＊＊＊＊

住まいル新聞

日本ステンレス工業株式会社
発行/日本ステンレス工業株式会社
〒409-0617 山梨県大月市猿橋町殿上630-1
電話=0554-22-2500
FAX=0554-22-5234
Vol.132 2010 9月号

大月人物伝　初代大月市長　後藤　義明

大月市は県東部に位置し、東京都心からは八十キロメートルの関東大都市圏内に入る市である。

町村合併促進法が公布されたのは昭和二十八年九月。昭和の大合併と言われたのは翌年の昭和二十九年で合併によって成立したのは全国で百七十四市である。大月市も市制施行当時の人口は四万を超え、将来的に大いなる夢と希望が期待された筈である。その期待を一身に、初代市長後藤義明が誕生したのは、今から五十六年前の九月二十七日のことであった。

一時は地価高騰の影響を受け、都心からの転入者が増えた大月市であったが、最近は長期不況で都心回帰現象が起きて、人口は毎年減少の傾向にあり、平成二十二年一月一日現在の人口は二万九千百五十六人となっている。

◆大月市初代市長の誕生

昭和二十九年八月八日、北都留郡大月町・猿橋町・七保町・梁川村・笹子村・初狩村・賑岡村が合併し市制が施行された。冨浜村を編入して現在の市体制が確立されたのは、翌月九月八日のことである。更に九月二十七日市長選挙の投票が行われ、即日開票で初代市長として後藤義明が選ばれた。義明六十九歳の時である。

八ケ町村合併という大規模な政変であるから、初代市長としてのリスクは、当然大きい事が予想された筈である。彼があえてそのリスクを背負う決意をしたのは、実績もさることながら、その人となりを評価する周りから、強く推されたからではないかと思われる。

そんな彼の初代市長としての決意が窺える「就任のことば」（大月弘報第一号）を紹介する。

「先般の市長選において私は、多数市民のご推挙によりまして、初代市長の重職に就くことになりましたことは、私の最も光栄とするところであります。もとより不肖の身でありその器ではないと存じておりますが、市民の皆さんより私に寄せられた御期待と御要望に副うべく、渾身の努力を捧げて任務を全ういたし、老生最後のご奉公を致す覚悟でございますから、よろしく御指導御支援の程、衷心よりお願い致します。私は就任に際し全市民の『和』の上に立つ市政の実現を期したいと存じます。三町五ケ村が対等合併して、大月市を作り上げたのであります

から、旧各町村にはそれぞれ永い間の歴史と伝統があり、この環境に育まれたこの八ケ町村住民の観念は、一期にして渾然融合の域に達するものとは思われませんので、今後凡ゆる機会において『和』の精神をもって相互の理解と協力を深め、真に四万の市民が手に手を取り合って新市政の具現につとめて行きたいと念願するものであります。それで私は市長としての抱負や施政の方針を、大袈裟に取り立てて申し上げる事は差し控えたいと思います。それはいかなる聖人が行っても、無理な事は成就致しません。又この半面、凡夫と雖も『誠』をもって行えば、かなりの難業が成し遂げられると信じます。ですから私は飽くまでも、一凡夫として自己相応の力によって、『和』と『誠』の精神を基調と致しまして、市民が円満に治まり坦々たる道が拓けて、事がた易く進むことが出来れば、私の最も欣幸と考える所であります。

従って私は三つの事がらを皆さんにもお願い致し、且つ自分自身にも留意致しつつ、市政に携ってまいりたいと思います。その第一は市民の納得の上に立つ市政の運営という事であります。市が今どのようなことをやっているかということを、素直に市民各位にお知らせし、よく理解を願い、ご意見を拝聴し、知る事による相互の理解そして協力という形におかれる市政を計りたいと思います。第二に仕事は地味に堅実に運行し、着実な市政の運用を期したいと思います。市の行政が円滑に運営されます為には、先ず第一に市財政の状態が健全な姿におかれねばならぬと思うのであります。現代の国家、政府の施策は、地方自治体の自主的運営ということを、等閑に附している傾向がありまして、多く自治体は貧困財政に悩んでおります。自己の財政力を無視した派手な財政運用は許されません。堅実且つ健全な財政の運用を計り、仕事は地味であっても、将来大月市の為になるような決意で事にあたって参りたいと思います。第三に私は、誠意と愛情をもって市政の育成に努めたいと思います。うまれたばかりの大月市の前途には、多くの難関が横たわっています。いわば大月市という若木を育て、枝も葉も茂って総て立派な実を結ばせる為には、余程の愛情を必要とします。願わくば市民各位におかせられましても『和』の精神に立って、一日も早く旧町村の観念や部落根性を打破し、小異を捨て、大同に着くの大気宇を持たれ、住み良い郷土大月市のために十分なるご協力を賜らんことを重ねてお願い申し上げます。以下略」

この就任の挨拶の随所に初代市長としての意気込みと決意が、誠実且つ切実な言葉で胸に迫ってくる。当時の地域意識というのは、現在とは比較にならない位強く深いものであっただろうし、しかも八ケ町村合併という大掛かりな政変を任されたわけであるから、初代市長として義明が背負った責任感と覚悟の程は、想像をこえるものであったに違いない。

◆その生い立ちと経歴

後藤義明は明治十八年八月二十二日、現在の真木の間明野で、父美濃作・母たにの長男として生まれた。義明が小学校に入学する当時は、間明野には真木尋常小学校の簡易科（分校）が設置されていて、義明は其処に通ったものと思われる。高等小学校に入学したのは明治二十九年である。当時は、尋常小学校四年・高等小学校四年生で、尋常小学校は義務教育であったが、高等小学校は義務教育ではなかった。従って明治二十九年当時間明野から真木に加設されていた高等小学校（この高等科は明治三十六年に閉鎖、以後花咲に広里高等小学校として開設）迄通った者はごく稀であったと思われる。それは義明が学業に優秀且つ努力家であったとしても、家庭環境に恵まれなければ実現不可能な時代であったとも言える。

明治十七年頃は生糸・繭価の下落や重税で困窮し、高利貸からの借金に苦しむ農民が、各地で国民党や借金党を結成するなど、社会情勢は極めて不安定な時代であった。近県の秩父地方では国民党を中心に、農民約一万人が田代栄助達の指揮下のもと、借金返済の長期延期や各種の税引き下げなどを求めて、農民の自治と自由を掲げ、いわゆる農民一揆を起こし、農民達が軍隊組織をつくったのも明治十七年である。義明が生れた明治十八年という年は、そんな激動の社会情勢の最中でもあった。

義明の生家は材木業を営んでいたが、明治維新後発達した鉄道の路線拡大は著しく、父美濃作は鉄道の枕木の製造販売で財を成した。しかし義明は高等小学校卒業後、家業を継がずに絹屋の番頭として修行に出たのだった。その奉公先を知る人は現存しないが、将来的な展望を察知しての行動であったと思われる。二十四歳の時に織物仲買業を開業している。明治四十二年八月一日のことである。

大月人物伝
歴史探訪

初代大月市長　後藤　義明

その後自身も織物業を営むようになり、商売の方でも才能を発揮した。立身出世を果たした人に共通しているのは、古き良きものを大切にする心と、開拓心との融合、加えて包容心と寛容心の持続、日々自己研鑽を怠らないこと等である。義明を良く知る人々が口を揃えて言う言葉は、「細かい事は言わない度量の大きな人だった」また「お金を踏み倒されても、その相手を許して面倒を見た」「経済時勢を的確に読む眼力があった」などである。

嫡孫である現市会議員の慶家氏の言を借りれば「商才があったのではないか」というが、彼は本質的には政治家であった。義明の職歴を見ると、彼の活躍範囲の広さに改めて感心させられると同時に、その事が裏付けられるのである。

・大正二年四月一日、北都留郡広郷村在郷軍人会々長に就任。
・大正四年五月二十五日、同会長を辞職。
・大正四年十月一日、北都留郡甲斐織物同業組合代議員に就任。
・大正八年十二月三日、同代議員を任期満了辞職。

仲買業等で業績を上げた義明は、一時真木に住居を構えたが、大正十一年に現在の大月町駒橋九九二番地に転居している。

この駒橋の家は、最近になって近代的な家に新築はされたが、それ迄は問明野にあった生家をそのまま移築したものだったという。

・昭和四年八月一日、大月町議会議員に就任。
・昭和八年七月三十一日、同議員を任期満了辞職。

以来十四年まで町会議員を三期務めている。

・昭和十四年七月三十一日、町長に就任。二年で町長を辞職してその後も町会議員として在職し、昭和二十一年までの五　年間町の行政に携わっている。この間の経緯は不明であるが町会議員を辞める時は議長職にあった。
・昭和二十一年四月一日、山梨県織物産業株式会社社長に就任。
・昭和二十四年五月一日、山梨県県会議員当選。
・昭和二十六年六月二十六日、山梨県公安委員となり翌年十二月二十五日まで在職。
・昭和二十八年四月一日、北都留郡西部織物協同組合理事長に就任。翌年市長選出馬まで職務を全うする。
・昭和二十九年九月二十七日、初代大月市長となる。
・昭和三十年、山梨県市長会副会長就任。
・昭和三十一年九月一日、全国市長会関東支部理事就任。

この職歴からも分かるように、二十八歳にして地域の在郷軍人会長に推され、以来初代市長に当選するまでの四十数年間ずっと、何等かの形で、公人としての肩書から離れなかった人である。

◆初代市長任期中の業績

合併は八ケ町村による無条件の合併であったから、夫々の町村が抱えていた借入金・事業の継続、合併に合わせた駆け込みの事業の受け入れなど、新体制が負わねばならないリスクは相当なものであったと思われる。

合併一年後の昭和三十八月五日、第四回臨時市議会における、後藤市長の市政報告は次のようものであった。（大月弘報第二号）

『前略…合併に際し、八ケ町村借入金（一千四十万円）を引継ぎ、赤字財政に悩む連合体は、一層窮屈な形となったわけであり、しかも合併第一年であります。しかも合併予算の仕事も沢山有り、又年来の宿題・懸案であった事業を、追加予算に相当無理をして計上して持ち込んだ町村もありましたが、元より無条件の合併でありますので、これも承認しない訳にはゆかぬので、可成の無理を承知致しつつも、大月市としての合併予算を編成した次第であります。しかもその財源となるべきものの多くは、町村税の滞納繰越であり、これに加えるに本庁と支所の機構の整備と、人員の配置による数ヶ月のズレと、事務の不慣れ不連絡、更には旧町村としての観念を、完全に拭い去ることが出来ず、旧特別職であった助役・収入役であった人々などが、俄に一事務員として、第一線の瑣末な仕事を、完全に果たす事は中々困難である事情などがかち合って、徴税成績がガタ落ちした、ということも見逃すことの出来ない事実であって、旁々一層財政は苦しくなり、昭和二十九年度においては、一千九百万円の支払い繰延べをみたのであります。昭和三十年の予算編成は、中略…決して新鮮味のある予算とは申されませんが、現下機業地に見られる呼吸器系患者が特に当地に多く、現在済生会大月病院（市立病院の前身）の入院内外患者の中、六・七割はこれに類する病気であって、県下の結核療養所は、殆ど満員にして新患者収容の余地がないと聞いておりますので、亡国病の救療こそ緊要と考えまして、国からの補助と済世会本部よりの借入金と、郡下市町村による一部事務組合により、本市より二百五十万円、上野原町四十万円、丹波・小菅両村にて十万円それぞれ負担し、結核病床五十ベット建設を計画いたしました。勿論これはひとり結核患者に限られたものではなく、当市のヘルスセンターとして役立つことは火を見るよりも瞭かであります。…中略…第一回追加予算は、予算議決の際に確約した産業経済費と教育費の追加、及び県から割り当てのあった公営住宅二十四戸の建設費等、又特別会計では初狩中学校及び屋内運動場、七保上和田分校集会所継続事業、富浜簡易水道並びに猿橋簡易水道事業等何れも合併建設計画による追加計上であります。…後略』

この報告の締めくくりに、赤字財政解消の為の行政努力として

◎職員の一般的・専門的研修による行財政運営の適正化・能率化の推進。
◎消費的経費の節約・徴税成績の向上。
◎赤字解消計画による歳入確保・歳出の規制努力。

等を上げている。同時に地方自治体の自主的運営も、国で定められた制度の枠内でしか行えない事のもどかしさと難しさを列記するなど、大合併に依る新体制の産みの苦しみの滲み出た市政報告になっている。

第二次世界大戦で無条件降伏をして、漸く復興の兆しが見えながらも、昭和三十年前後は、大月市における地場産業の織物業界は、神武以来の不景気とさえ言われていた。そんな時代を背景に、大月市という船は、市長のいう『和』と『誠』の帆を掲げて船出したのである。市長としての義明の功績は、大月丸の船舵を身を挺して取り続けたことであろう。そんな義明が『眼』に入れても痛くないほど可愛がったのが、嫡孫である慶家氏であったとか。彼は現在市会議員として、祖父と同じ政治の世界に携わっているが、義明は公私を混同する事は決して無かったと話す。昭和二十九年当時、市長車での出迎えは物珍しく、家の前に迎えの車が到着すると、近所の者が外に出て見物したものだという。然し小学生だった慶家氏が学校まで乗せて行ってと頼んでも、決して同乗を許さなかったとか。

義明の賞罰及び受賞は次のとおりである。

・昭和十年六月十日、山梨県主催の織物品評会に、地場産の人絹織物を出品し、見事県知事特別賞を受賞。
・昭和十一年十一月六日、アメリカのニューヨーク博覧会に洋傘地を出品、ニューヨーク知事より感謝状を受ける。
・昭和三十一年十一月二十一日、町村合併功労者として、自治庁長官より表彰。
・昭和三十一年十二月十七日、義明は在職中に急逝、満七十一歳の生涯を閉じた。任期三年目である。

初代市長としての激務が、その死を早めたのであろうか？それを否定する事は出来ない。葬儀は大月市で初めての「市葬」であった。

・昭和三十二年一月十四日、勲六等瑞宝章を受章。

市制施行から五十数年、必ずしも先行きの明るくない大月市の現状を、菩提寺である真木の福正寺で眠る義明は、今如何思っているのだろうか？

参考文献　大月市弘報一号／二号
資料提供者　後藤　慶家氏
執筆者　小俣　早苗